

OSAKA
DENTAL
UNIVERSITY



大阪歯科大学広報

NEWS

No.

137

2005. Mar

目 次

・平成17年新年互礼会 ……………3	・大阪歯科大学公開講座・枚方講座 ……………10
・年頭所感 理事長 佐川寛典 ……………3	・毛利 学教授はじめ5名定年退職 ……………11
・年頭所感 学長 今井久夫 ……………3	・定年退職にあたり 毛利 学 ……………11
・平成16年度 大学卒業式	・定年退職を迎えて 井上正義 ……………11
大学院学位認証式 ……………5	・健康退職に感謝 北條博一 ……………12
・平成16年度 卒業式学長告辞	・私の健康法「鼻呼吸」 松川正永 ……………13
学長 今井久夫 ……………5	・定年にあたって 吉田敏昭 ……………14
・平成16年度 卒業式理事長式辞	<トピックス>
理事長 佐川寛典 ……………6	・図書館セミナー開催
・学位（博士）授与報告 ……………8	「インパクトファクターを読む」 ……………15
・平成16年度 解剖体遺骨返還式 ……………8	・寄 贈 ……………18
・「スマトラ島沖地震」被災者救援金報告 ……9	・人 事 ……………18
・「個人情報保護法」施行に伴う講習会開催…9	・あ と が き ……………19



平成16年度 大学卒業式・大学院学位認証式（平成17年3月22日）

ODU NEWS No.137

平成17年新年互礼会

平成17年1月5日(水)午前11時より、新年互礼会が楠葉学舎講堂において開催された。

教職員および本学関係者が多数出席し、田中法人事務部長の進行により、佐川理事長ならびに今井学長が新年の挨拶を述べた。終了後、食堂において川添副学長の乾杯の発声で新春の歓談会が開催され、本学の平成17年がスタートした。

年頭所感
—2005年の新春を祝う—

理事長 佐川 寛典

新春を言祝ぎ、大阪歯科大学教職員の皆さまと共に21世紀に餅(こだま)する「健康日本」に平和の夢を膨らませながら、心よりお慶び申し上げます。

平成17年、十二支では10番目の「酉」で、方角は「西」であり、幸運の「矢」は西に放たれ、母校大阪歯科大学を西日本に持つ我々にとって喜ばしいことである。

昨年の2004年は異常気象の猛威にみまわれ、災害の年となり、大自然のもと、人間の弱さを痛感した。私も、1946年の四国沖の「南海地震」における津波を経験し、今回の「スマトラ島沖地震」による津波の恐ろしさは誰よりも理解できている。

さて、中国の古い教えに「寧ろ、鶏口となるも牛後となることなかれ」ということわざがあるが、ちょうど、今年は「酉年」であり、ニワトリが嘴で餌を探すように、何事も自ら積極的に求め、決して「牛に引かれる牛車」であってはならないのである。表現を変えれば、小さくても日本は日本、大国に対して、毅然とした態度で臨んで行きたいものである。

「スクレイピー」いう脳疾患で死んだ羊の肉を飼料とした牛に発生する脳の変性・破壊を主徴とする「狂牛病」や「鳥インフルエンザ」のウイルスが世界を駆けめぐり、また一向に沈静のみえない「イラク戦争」などなど…、救世主はどこにいますのでしょうか。

今年こそは、混沌とした歯科界の暗雲を払い除け、21世紀に根ざす新しい教育改革や高度先進医療を目

指しての医療技術の開発や研究、国民が生涯を安心して暮らせる安定した国民の国民による福祉と国民一人ひとりの健康を守る医療が必要である。最近、WHO(世界保健機関)が警告しているのは、「メタボリックシンドローム」——すなわち糖尿病、高血圧症、高脂血症のリスクが重複して存在する状態で、日本でも「マルチプルリスクファクター症候群」と呼ばれていたものであるが、今その重要性が再認識されている。このメタボリックシンドロームを予防するため、私たちは生活習慣全般の改善に努めなければならない。そして、世界中の人たちが健康で、宇宙で水のある唯一の青い惑星で知られる私たちの地球を愛し、自然を大切に、戦争のない真の平和な、夢と希望に満ちた2005年でありまことを皆さまと共に祈りいたします。

大阪歯科大学は皆さんのものです。みんなで力を合わせ、勇気と知恵を持って、大阪歯科大学をみんなで守り、そして個性に輝く、関西唯一の名門歯科大学としてのアイデンティティの創造と確立に努めようではありませんか。

最後になりましたが、大阪歯科大学教職員ならびに学生の皆さまのご健康とご多幸をご祈念申し上げ、2005年の所感といたします。

平成17年の年頭所感

学長 今井 久夫

天災、人災の多かった申年も去り、希望と夢の実現に向かって羽ばたく酉年を迎え、教職員の皆様方におかれましては、今年度に期する強い思いと、大きな期待を抱いておられることとお察し申し上げます。そこで、2005年の年頭に際しまして、学長、病院長としての5か条の所感を述べさせていただき、同時に教職員の皆様方のご支援、ご協力のもと、実現に向かって努力していきたく考えております。

まず、第一に少しでも多くの教職員、学生たちに小生の考えているNGOをご理解いただき、各人の持ち場で生かしていただければと願っております。

周知のように、NGOとは“Non-Governmental Organization(非政府組織)”の略で、ボランティア的

要素の大きい民間組織のことで、私の言うNGOとは、現在若い人たちに最も欠けており、しかも忘れられているN:人情、G:義理、O:恩情・恩義を指し、とりわけ「人様にかけた情は忘れても、人様から授かった恩情は忘れてはならない」という格言にあるように、世話になった恩師、親兄弟、先輩、友人たちからいただいた恩情、恩義の心を学生教育に生かしていきたいと考えております。このことを、学生たちに理解してもらえれば、平和で楽しい人間関係が築かれることと固く信じております。

次に、本学の国家試験の合格率を高めることです。この件につきましては、中村教授に副学長の就任をお願いした時点で協力をお願いしましたが、快く引き受けていただき、さっそく大学事務の協力のもと調査したところ、前年度卒業生の6年間の試験結果と国家試験合格率とにかなりの相関を見出すことができました。今回得られたエビデンスを教務部長、教務部委員会と連携を密にして、国家試験合格率の向上に生かしていきたいと考えております。このようなことを考えたのは、決して大学の名誉回復のためだけではありません。むしろ、全教員に理解と自覚を促すためでもあるのです。すなわち、ご父兄からお預かりした歯科医師の「卵」を冷めた人工的な方法ではなく、温かみのある体温で育み、国家試験の発表と同時に患者さんからはもとより多くの人から慕われる立派な歯科医師として活躍できる「ヒヨコ」に育つべく孵化(国家試験合格)に努めることが、我々大阪歯科大学の教員に課せられた命題でもあるからなのです。

第三は、理事会と教授会、同窓会との連携に努めていくことであります。周知のように、理事会とは人事の任命権、管財を司り、教授会は大学の管理・運営の任にあたるものであると考えております。したがって、理事長と学長とは一線を画すとしても、必要事項に關しての連携は密にしていきたいと考えております。また、大学と同窓会とは常に連携を図りながら繋がっているのが本学の大きな特徴であり、今後ともそのための努力は惜しまないつもりです。

四番目は、大学と附属病院とは密接不離の関係でなくてはならないということです。換言しますと、大学附属病院は大学という機構の中の一分野であるといえるからです。このことから、

1. 高齢少子化にともなう患者減、収入減に対する

病院の取り組み

2. 平成18年度から開始される卒後臨床研修の必修化(義務化)に対する対応
3. 口腔診断科の将来像
4. 病院診療科の必要に応じた統合化
5. 時代に沿った、あるいははしかるべき分野で対外的に認められ、その必要が求められる科あるいは部、室の新設

等についても、教授会で取り上げ、教養系、基礎系、臨床系の各教授で検討を行い、必要に応じ病院教授や助教授の出席をお願いして意見を聞くなどしながら、教授会も附属病院の将来設計に対し積極的に参画し、共に考え、「良し」と判断すれば積極的に実践すべきであるとと考えております。このことは、本年4月から就任される新病院長に対する大きなサポートにも繋がることと信じております。

最後に、学長としてではなく病院長として、一言所感を述べさせていただきます。周知のように、2004年は天災の多い年でした。同時に、本学附属病院では残念なことですが、人災の多い年でもありました。どうか、病院関係の教職員におかれましては、年頭に際して、心を新たに、同時に医療職に携わっているスタッフ、コ・スタッフの一員であることの誇りと認識を深めていただきたく願っております。

以上、年頭に際し、実施可能な5項目について、小生の所感を述べさせていただきました。しかし、これらを全うするには、学長としてのリーダーシップを発揮させなくてはならないことは言うまでもありませんが、同時に、本学の教職員のご協力、ご支援なくしては日の目を見ないことも強調させていただき、学長としての、年頭の挨拶とさせていただきます。



平成17年新年互礼会

ODU NEWS No.137

平成16年度 大学卒業式 大学院学位認証式

平成17年3月22日(火)午前10時より、第53回大学卒業生卒業証書・学位記授与式ならびに第41回大学院博士課程修了者学位認証式が、小雨交じりの天候のなか楠葉学舎講堂において行われた。

開会の辞で始まり、国歌斉唱の後、今井学長より大学卒業生125名、指導教授より大学院修了者21名一人ひとりに学位記が授与された。学長告辞、佐川理事長の式辞、来賓祝辞、卒業生記念品贈呈と続き、最後に一同学歌斉唱し、式典は無事滞りなく終了した。

平成16年度 卒業式学長告辞

学 長 今 井 久 夫

あいにくの雨模様であります。日に日に春の気配が強く感じられるこの良き日に、ご卒業されます125名の卒業生の皆さん、本日は誠にありがとうございます。卒業生の皆さんにとっては、この6年間は長いようで短かったものと思います。また、卒業生のご父兄におかれましても、この日を迎えられるまでには、一日千秋の思いで過ごされてこられましたこととご推察いたします。その意味におきましても、本日は本当におめでたい日であり、心よりお祝い申し上げます。

さて、本日卒業される皆さん方は、先ほど申し上げましたように、無事6年間の学業を終えられまして、つい先日17、18の両日行われました国家試験を受けられたのでありますが、学長としては、欲張りかもしれませんが、100%の合格を信じてやみません。

ただ、本日の卒業は、皆さん方にとってはおめでたいことであり、喜ばしいことでありますが、ご父兄はもとより学生さん方も周知のように、貴方が進もうとしている歯科界は決して甘くはないということです。むしろ、厳しい歯科界が待ち受けているといっても過言ではありません。換言しますと、現在の歯科界は貴方が過ごしてこられた学生時代のような甘い考えは通用しません。むしろ、歯科界の荒波に立ち向かっていく強い精神力と体力を養っていかなければ、これか

らの歯科界は乗り切っていけないでしょう。したがって、これからは先生やご両親、先輩たちから強制された『勉強』ではなく、自らが学ぶことに勉める『勉学』が要求されます。この『勉学』の精神が無ければ、患者さんのニーズ、要望に応えられないでしょうし、同時に新聞や雑誌、テレビなどで一日一回は目にする医事紛争、医療事故にもつながるといっても過言ではありません。また、4月1日からは「個人情報保護法」が実施されるなど、これからの歯科界は益々厳しさを増すものと覚悟しなくてはなりません。

さて、話は少しそれますが、周知のように私は昨年の9月1日に学長職をおおせつかりしましたが、就任当初から、昔から言われている3種の神器ではありませんが、『N・G・O』という言葉の基盤にこれからの学長職を全うしていこうと考えております。『NGO』とは、皆さんもよく知っておられる“Non Governmental Organization(非政府機関・組織)”を意味しておりますが、私のいう『N・G・O』とは、『N』すなわち人情、『G』義理、そして『O』恩情、恩義を意味しております。現在のように小・中・高の学校教育にあっても、受験戦争という厳しい世相も反映して、義理・人情という実態が失われつつあるようで、悲しいことだと思っております。そこで、少なくとも貴方方には、どうしても忘れてもらいたくないのが、『O』すなわち恩義、恩情であります。昔から言われている「他人にかけた情けは忘れても、他人様から授かった恩義・恩情は忘れてはならない」ということです。今日、貴方が晴れて卒業式を迎えられたのは、決して貴方だけの力ではないということを肝に銘じてください。もちろん、貴方の努力なくしてはかないませんが、厳しい社会情勢、苦しい生活状況の中にあるにもかかわらず、表には出さず貴方方を通わせていただいたご両親、一人前の歯科医師に育てるために教育に携わっていただいた多くの教員、また学園生活に支障が無いようにとの配慮で多方面からサポートしていただいた多くの職員に対する恩義、恩情を決して忘れないよう、同時にそれらの恩義・恩情に報いるための努力を怠らないようお願いいたします。このことが、貴方たちの最も貴重で、大きな恩返しになるものと信じております。

最後に、「人生には卒業無く、きみが知性の礎と成さん」という言葉をお贈りしたいと思います。幼稚園から始まり大学まで、その区切り、区切りにおいて卒

業式はありますが、人生に卒業はありません。常に勉学と研鑽が必要であり、各区切りの卒業を迎えても、それらは貴方方の知性の基盤となつて、貴方方を成長させてきたのであります。したがいまして、今日の卒業を糧として、また、新しい卒業に向かって進まれんことを祈念して、学生の皆さん方への告辞とさせていただきます。

さて、大学院修了者21名の皆さん、本日は誠にありがとうございます。また、ご父兄におかれましても、本日ご子弟が指導教授から直接、学位記を授与されている晴れ姿を目の当たりにされて、感慨もひとしおのこととお察し申し上げます。本当におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

今回、無事大学院を修了された中には、卒業後直ちに大学院に入学された方もおられますが、1年間の卒業後研修を修了後入学された方もおられます。いずれにしても、4年間お疲れさまでした。同時に、この4年間で暖かい目で見守っていただきましたご父兄に対しましては、敬服の念を覚えすにはおられません。

今回、大学院を無事修了され、直ちに地域社会の臨床に携わられる方もあれば、そのまま専攻講座に残って後輩の大学院生の指導、あるいは学生教育に携わっていかれる方、様々であろうと思います。しかし、皆さんが手掛けられた研究は、おそらくその緒に就いたばかりであろうと推察されます。今後は、講座に在籍される方はもちろんではありますが、そうでない方も大学院講師(非常勤)として後輩の指導に当たられますことを願ってやみません。今回、大学院を修了された皆さん方には、『釈迦に説法』かとは思いますが、教育・研究・臨床の場にあつては、その時代の世相が反映されていることは十分にご理解いただいております。と思ひますが、一般社会においても同様で、ペイオフや個人情報保護法の施行など、新しい波が次から次へと押し寄せてきます。どうか、これからは医療の場のみならず、一般社会にも目を向けていただきますようお願いしております。

最後に、大学院修了者の方々には「医者と坊主は物知りであり、物識らず」という言葉を贈ります。とかく、医者や坊主は自分の職域のことに関しては非常に多くの知識を有しておりますが、一般社会情勢に関しては疎い面があります。どうか、歯科医師、研究者と

しての専門知識の修得、研鑽に努められると同時に一般社会の勉強にも勤しんでいただきますようお願いして、学長の告辞とさせていただきます。

平成16年度 卒業式理事長式辞

理事長 佐川 寛典

大阪歯科大学第53回、125名のご卒業の皆さんならびに第41回大学院博士課程修了者、21名の皆さん、また、本日のこの日を一日千秋の思いでお待ちになられたご家族の方々、本日は本当におめでとうございました。

心よりお慶び申し上げます。

さて、先日の3月16、17両日行われた国家試験も無事終えられ、まもなく4月19日には発表ですが、皆さんの晴れ晴れと自信に満ちた明るい顔を拝見して、安心いたしております。

私たち教職員は愛情あふれる教育に力を注ぎ、大学院においては専門分野の情熱あふれる研究指導により歯学博士の学位を手にされた方々も含め、大阪歯科大学の建学の精神を身に付けた人間性豊かな優秀な歯科医師の誕生となり、歯科医師のプロフェッショナルとして、国民の歯科医療を通じて国内はもとより広く、国際舞台でご活躍されることでありましょう。

ご存じのように、皆さんの卒業後の大学は平成18年より始まる卒業後研修の必修化に向けての受入れ準備、大学院重点化や高度情報化への対応等、教育改革も目まぐるしく変化し、ますます厳しさを増すことでありましょう。

大学改革の柱として、教育・研究の高度化、高等教育の個性化、組織運営の活性化が挙げられ、大学は、競争的環境の中にあつて個性輝く大学づくりをしなければならないのであり、これからの医療は、E. B. M. (エビデンス・ベースド・メディシン)——すなわち、「根拠に基づく医療」でなくてはならず、さらに、高度先進歯科医療の促進と発展に向けての研究と奉仕を続けなければなりません。

昨今の医学の進歩は著しく、再生医学やゲノム解析分野、とくに、遺伝子多型解析の科学技術の進歩を背景とした医療改革が進んでいます。個々の遺伝子解析

により、病気の発症機序解明はもとより、その患者に最適で、より効果的な投薬や治療法を選択して、最適な医療を提供する、いわゆる「オーダーメイド医療」が、ごく近い将来実現可能となってくるであろう。

大学を離れても、常に新しい知識を求め、学究精神を失うことなく、頑張られることを切望します。

そこで、私は、皆さんに次のような日本人になっていただきたい。

- ①『勇氣』をもって行動する日本人
- ②『誠』の心で接することができる21世紀のトップリーダーである日本人
- ③『生命』を大切にし、心豊かな文化と社会を継承し創造できる日本人
- ④『愛』をもって国際社会に奉仕のできる教養ある逞しい日本人
- ⑤『夢』があり自分の職業に誇りを持つ日本人——であります。

真の世界平和を望み、惑星の中で唯一の水のある青い惑星の地球と、人の生命を大切にする人たちと手をさしのべあって美しい自然を守って行きたいものです。

最後になりましたが、皆さまのご健康とご活躍を祈念して理事長の式辞といたします。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞



学位（博士）授与報告

- 大東希好 甲第530号 (平成17年3月22日)
A possible role of phospholipase C and phospholipase D in chemotaxis (走化性におけるホスホリパーゼCあるいはホスホリパーゼDの役割)
- 西川 学 甲第531号 (平成17年3月22日)
健常有歯顎者の下顎臼歯における三次元咬合力ベクトルの解析
- 松田佳子 甲第532号 (平成17年3月22日)
Negative pressure airway reflex に対する咽頭腔内 CO₂ 暴露の影響
- 福田あおい 甲第533号 (平成17年3月22日)
骨髓細胞を用いた二次的血管柄付き移植骨片作製に関する実験的研究
- 上田佳世 甲第534号 (平成17年3月22日)
Mineral Trioxide Aggregate の硬組織形成誘導能に関する細胞レベルでの研究
- 古川智代 甲第535号 (平成17年3月22日)
Prevotella nigrescens の exopolysaccharide 高産生性回復と関連タンパク解析
- 田中秀直 甲第536号 (平成17年3月22日)
口腔筋機能訓練の顔面に及ぼす影響について
- 伊津元博 甲第537号 (平成17年3月22日)
画像解析を応用した初期歯肉炎審査
- 玉田 享 甲第538号 (平成17年3月22日)
MINI自動心理診断システムによる上顎前突症患者と下顎前突症患者の性格傾向の検討
- 山下智章 甲第539号 (平成17年3月22日)
Behavioral and histological study of peripheral nerve disorders using and animal model (末梢神経障害による神経麻痺動物モデルの行動学的・組織学的検討)
- 藤井孝政 甲第540号 (平成17年3月22日)
線維強化コンポジットの形態がブリッジの強度に及ぼす影響
- 松本康宏 甲第541号 (平成17年3月22日)
口腔由来 *Prevotella intermedia* の β -Lactamase 遺伝子に関する研究
- 善入雅之 甲第542号 (平成17年3月22日)
表面改質チタンの細胞適合性と細菌付着性

- 田村浩伸 甲第543号 (平成17年3月22日)
口腔扁平上皮癌細胞の浸潤能に及ぼす *ets-1* の影響
- 大橋芳夫 甲第544号 (平成17年3月22日)
レーザアブレーション法を用いて製作したハイドロキシアパタイト超薄膜被覆チタンインプラントの骨形成に関する実験的研究
- 砂田和久 甲第545号 (平成17年3月22日)
Perfluorocarbonを用いた Er:YAG レーザー照射の象牙質に対する影響
- 伊藤雄一 甲第546号 (平成17年3月22日)
Production and characterization of novel monoclonal antibody to rat periodontium (ラット歯周組織に対するモノクローナル抗体の作製と性状)
- 原 良子 甲第547号 (平成17年3月22日)
Marker of cemento-periodontal ligament junction associated with periodontal regeneration (歯周組織再生に関連するセメント質歯根膜界面)
- 松島恭彦 甲第548号 (平成17年3月22日)
咀嚼運動における大脳皮質の賦活部位に言語優位半球が及ぼす影響
- 民上良将 甲第549号 (平成17年3月22日)
ラット歯周組織欠損の治癒過程におけるエナメルマトリックスデリバティブ応用後の酒石酸耐性酸性フォスファターゼ陽性細胞の出現について
- 岡下慎太郎 甲第550号 (平成17年3月22日)
Temporary Anchorage Device の形態が顎骨の応力分布に及ぼす影響
- 熊崎佳美 乙第1456号 (平成17年3月23日)
耳小骨の光吸収スペクトル解析とレーザー照射実験

平成16年度 解剖体遺骨返還式

平成16年度解剖体遺骨返還式が、去る平成17年3月4日(金)午後1時から、楠葉学舎3階大会議室においてご遺族、今井久夫学長、辻井純弘黄菊会会長、解剖学講座教員、関係事務職員ら45名が出席し、しめやかに挙行された。

はじめに、歯科医学教育のために自らの身体を提供された故人の御霊に対し、参列者一同ご冥福を祈り、黙祷を捧げた。続いて、今井学長より歯科医学教育に

において必要不可欠であるご献体の篤志に対するお礼を述べられた後、ご遺族お一人お一人に丁重にご遺骨が返還された。

最後に、解剖学講座諏訪文彦教授から「献体にご協力を賜ったご遺族に対し心からお礼を申し上げたい」との謝辞が述べられ、ここに平成16年度解剖体遺骨返還式は無事滞りなく終了した。



平成16年度解剖体遺骨返還式

「スマトラ島沖地震」被災者救援金報告

昨年12月26日に発生した「スマトラ島沖地震」とそれに続く巨大な津波による被害に際し、本学では被災者救援のため1月18日から2月15日まで救援金の募集を行いました。教職員の協力により、合計288,995円の救援金が集まりましたことを報告します。この救援金は、日本赤十字を通じ被災者の救援活動に使われます。

「個人情報保護法」施行に伴う講習会開催

平成17年4月1日から「個人情報の保護に関する法律」（「個人情報保護法」）が施行されるが、それに先立ち3月25日（金）午後5時30分から「個人情報保護法施行に伴う講習会」が、天満橋学舎西館5階・臨床講義室で開催された。講師として、科学技術文明研究所特別研究員で本学医事法制担当の非常勤講師、稲葉一人先生を迎え、100名を超える教職員が参加した。また、

この講習会は楠葉学舎にもライブ中継された。

この法律は、個人情報にかかわる諸権利を個人に置くことを明確化したもので、同時に個人情報を取り扱う事業者（本学では病院・大学）に個人情報の『適正な取扱い』を求めるものである。対象となる個人情報とは、一定規模以上の体系的に整理された個人情報（データベースが中心）で、その取扱いについて――

- ① 利用目的の特定・公表（通知）
- ② 利用範囲の厳守（制限）
- ③ 適正な取得
- ④ 正確性の確保
- ⑤ 安全確保（管理）
- ⑥ 第三者提供の制限（本人の同意）

などが義務化される。また、本人から求められた場合は、『開示』、『訂正』、『利用停止』の義務を負う。

病院では、患者さんとの応対あるいは第三者からの照会において「立ち止まって考える勇気」を持ち、判断を急がず、法に照らしてあるいは担当者の判断を仰ぐことが必要である。また、大学においては個人データの処理を外部の業者に委託する場合は適切な監督を行う義務が生じるため、委託業者の選定基準、委託契約における個人データ保護の明確化などが必要となる。

本学では、今回の「個人情報保護法」の施行に対応して委員会が設置され、作業部会で検討を行い、基本方針・規程・マニュアル等が作成されることになる。

* 個人情報の保護に関する法律

平成15年5月23日に成立し（平成15年法律第57号）、同年12月10日「個人情報の保護に関する法律施行令」（平成15年政令第507号）により平成17年4月1日に全面施行されることになっている。

6章59条からなり、その第8条に国は「有効な実施を図るための指針を策定」することを規定しており、病院関係では厚生労働省が「医療・介護関係事業者における個人情報の適切な取扱いのためのガイドライン」（平成16年12月24日）、学校関係では文部科学省が「学校における生徒等に関する個人情報の適正な取扱いを確保するために事業者が講ずべき措置に関する指針」（平成16年11月11日）をそれぞれ告示している。

第4章の15条から36条にかけて、「個人情報取扱事業者の義務」が規定されている。

大阪歯科大学公開講座・枚方講座

本学の社会貢献のひとつである『公開講座』は、第12回目のメインテーマを「ミドルエイジと健康」と題して、2月19日から3月12日までの毎週土曜日午後2時から開催された。

今回の講師陣は、女性教員4名が担当し、ソフトな語り口で聴講者の好評を博した。夏の天満橋講座の経験を踏まえ、講師の先生方は講座が更に充実した内容となるよう準備万端整えて当日に臨まれ、スライドや資料を基に丁寧で分かりやすい解説を心懸けられているように見受けた。4者4様の健康に対するアプローチは、いずれも暮らしに役立つ話題が豊富で、直ちに実践すべく熱心に耳を傾ける受講者の姿が目立った。生憎、開講日は天候不順な日が続いたが、常に多くの聴衆を迎え、楠葉学舎講堂は毎週『まなびや』の熱気

で満たされた。

最終日には今井学長から、枚方講座4週連続受講者112名を代表して松本範子さんに修了証書と記念品が贈呈され、本年度も夏と冬の2度にわたる公開講座を無事に終えた。ご多用の折、講師という大役を務めてくださった篠原先生、塩路先生、辻先生そして方先生、有難うございました。



会場に下りて熱演する方先生

第13回 大阪歯科大学公開講座 メインテーマ

一口や歯の病気で悩んでいる人のためにー

- ・会 場 天満橋講座（附属病院）平成17年8月20日（土）～9月10日（土）
枚方講座（楠葉学舎）平成18年2月18日（土）～3月11日（土）
- ・開催時間 毎週土曜日 午後2時から午後4時

月 日	サブテーマ	講 師
平成17年8月20日（土） 平成18年2月18日（土）	口臭で悩んでいる	歯周病学講座 助教授 上田 雅俊
平成17年8月27日（土） 平成18年2月25日（土）	口が開けにくくて悩んでいる	口腔外科学第二講座 教 授 覚道 健治
平成17年9月3日（土） 平成18年3月4日（土）	唾が出なくて悩んでいる	高齢者歯科学講座 助教授 岡崎 定司
平成17年9月10日（土） 平成18年3月11日（土）	入れ歯で悩んでいる	欠損歯列補綴咬合学講座 講 師 兼平 治和

ODU NEWS No.137

毛利 学教授はじめ5名定年退職

平成17年3月末をもって、5名の教職員が定年退職されました。このたび定年を迎えられたのは、外科学講座の毛利 学教授、歯科保存学講座の井上正義教授、口腔診断科の北條博一病院教授、臨床研修教育科の松川正永病院講師ならびに吉田敏昭病院事務長であります。定年に際し、一文を寄せていただきましたので掲載します。

定年退職にあたり

外科学講座教授 毛利 学

この春、私は大阪歯科大学を定年退職することになりました。私が浅井良三先生に従って、本学に赴任したのは、昭和44年4月1日のことです。在職36年になります。この36年間、教職員の方々からご好意を賜り、充実した日々を過ごすことができて幸せでした。感謝の気持ちを込めて、この一文を草していますと、当時のことが懐かしく思い出されます。



着任した朝、浅井先生以下、私と後輩の福辻範彦君の3人は、白敷美輝雄先生にお会いすることができました。白敷学長は、「よう来なすった。ここは良い学校ですよ。浅井先生に講義だけをと考えていましたが、お若い方には物足りないでしょう。診療室を用意させましょう」と、暖かいお言葉を頂きました。こうして、同年9月1日から、耳鼻咽喉科の診療がはじまりました。

初代の浅井良三教授は昭和48年3月31日、本学を定年退職なさるまでの4年間、神戸大学時代と同様に全力投球され、教室の基礎固めに専念されました。先生の学問、臨床に対する姿勢はすさまじく、診療のこと、手術のこと、学会発表のこと、研究のことが毎日の話題の中心でした。10時間を越える手術でも決して手術場を離れられることはありませんでした。先生の下で過ごさせて頂いた4年間は、以後の私の心の支え

となりました。

昭和49年4月1日、私は二代目教授を拝命しました。35歳の時でありました。私は耳鼻咽喉科医を志して、神戸大学浅井良三教授の門下に入って10年目のことで、臨床医としては駆出しであります。これは大変なことになったと思いました。白敷美輝雄学長から、「ゆっくりと頑張りなさい」のお言葉を頂き、不安な気持ちが吹き飛びました。

他大学の大部隊と互角に戦うために、私は一つの目標を立てました。耳鼻咽喉科学と歯科医学は最も関係の深い学問であります。対象とする臓器が互いに近接するばかりでなく、いくつかの疾患の臨床では連携して治療する必要があります。両科は密接不離の関係にあるとの考えから、境界領域の仕事に的を絞りました。

教室員は私の考えを支持してくれて、どんな時にも、どんなことにも一致協力して事にあたってくれました。教室員みんなの努力によりまして、今日では、大阪歯科大学の耳鼻科は境界領域の仕事にかけては一流だという声を耳にするようになりました。こんな嬉しいことはありません。

私のようなものを受け入れて下さった大阪歯科大学に心より感謝します。教職員のみなさまから賜りましたご芳情は生涯忘れません。大阪歯科大学の益々のご発展と、教職員のみなさまがいつまでもお元気で、お健やかに過ごされますことをお祈り致します。

定年退職を迎えて

歯科保存学講座教授 井上 正義

大阪歯科大学を1966年に卒業後、歯科保存学講座坂 珧教授のもとに入局、以来39年間奉職し微力ながら教育、研究、臨床に力を注いでまいりましたが、この度、無事定年退職を迎えることになりました。このことは、



大学内外を問わず多くの関係者の方々の心あたたまご指導とご支援の結果であると存じております。衷心より深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

この39年間を振り返りますと、入局1年目は副手という身分の見習期間がありました。この1年間で教授の講義の出席とり、講義や基礎実習の教材の準備、教授診療の介助、先輩教員の研究の補助などさまざまな雑用を通じて教育、臨床、研究に関しての臨床系講座の教員としていろいろな研修を受けることが出来ました。私の場合も恩師稗田豊治先生をはじめ多くのよき先輩に恵まれ、幾多の知識や技能を習得することが出来ました。

入局半年ほどで大学を離れ、広島県の三原市にある三菱重工業の「三菱三原病院」の歯科に派遣され、総合病院の歯科を一人で任されたのは驚きと不安でいっぱいでありました。しかし、この一人で臨床の真只中に放り込まれたことによって、歯科医学を真剣に勉強し直すきっかけになりました。三原病院での勤務は6ヵ月ほどでしたが、貴重な臨床経験を得られたことや病院長をはじめ病院のスタッフの方々の温かいご支援をいただき、無事勤め上げられたことを感謝しています。僅か半年ほどの期間でありましたが、私にとっては人生の大きな転換期であったと思っています。

学生の技能教育の転換期は、やはり高速切削器具といわゆる水平診療の導入であると思われます。臨床に対応するための基礎実習として、出来るだけ臨床の場に近い環境を考慮した人の口腔をシミュレートしたマネキンの導入であり、水平診療を想定した高速切削器具使用であります。人間工学との出会いは、このようなシミュレーション教育において、如何に効率よく効果的に技能の向上を図るかという命題に取り組んだ時からであります。この研究の成果は随時、基礎実習に採り入れ、技術教育の効率化を図ってきました。

今、講座の研究テーマはこの歯科診療における人間工学的研究をはじめとして、審美修復の基礎と臨床応用に関する研究、歯科用レーザーの基礎及び臨床応用に関する研究、歯科教育の効率化に関する研究等を柱にすべての講座員がそれぞれのテーマについて研究し、業績を残してきました。

これからも優れた業績を残し、伝統ある保存学講座の更なる発展と、わが母校大阪歯科大学の躍進を願います。

健康退職に感謝

口腔診断科病院教授 北條 博一

歯科医の家に生まれ、大阪歯科大学に入学。卒業後もずっと母校の掌中で庇護された67年間、ただ「有り難い」の思いでいっぱいです。



卒業当時の昭和39年、「これからの歯科は咬合が中心」ということばで矯正学講座に入局しました。欧米各国から歯科矯正の臨床情報が入り乱れ、養殖池の稚魚のごとく知識を求め、高額の講習会を受けまくり、試行錯誤の臨床に夢中で十年間を過ごしました。その後、分科して進歩した歯科医学を臨床面で再統合する米国の流れを見聞し、予診科出向を機に総合診療計画を行うプランニングコーナーを設けました。ここで各専門医から教えていただいたことが、今日まで大学でお世話になる礎になりました。口腔診断とは、口腔を一臓器と考えて診断資料を整え、患者のプロブレムリストをもとに予後を想定し、治療スケジュールを作る一連を意味します。思い返しますと、教育患者さんについて、担当実習生と共に問診表、印象採得から診断模型、X線、口腔写真などを整え、治療計画立案のカンファレンスを、よくぞ根気強く行ったものです。

日本全国に歯科大学や歯学部が新設され、歯学の発展めざましい頃、中村正雄病院院長が口腔診断学の重要性を唱えられ、時流に乗って口腔診断科、そして口腔診断学講座となりました。口腔診断学講座はユニークな個性を持つ、いろんな人が集まり、それぞれが「目」や「耳」のように、その人でなければできない役割を持って脈々と運営されてきました。高須、黒田両先生と共に、私たちはあたかも多様性と協調性が全体として機能する「人の体」のようなものであったと思います。また、日本口腔診断学会の主要メンバーとして、東京医科歯科大学とも友好関係をもたせていただくことにより、歯学教育の主要な流れを早い段階で察知することができ、「発展する歯学」の中で過ごせたことは大変幸せでした。

主訴をよく聴くことから始まる口腔診断科の初診業務は、患者さんにとって何が最善なのかを共通の目的

として各専門診療科と連携してきました。これからも、口腔診断学は歯科医魂の根源と信じ、臨床教育の充実を願っています。

幸い健康に恵まれての毎日、一つ一つの出来事を不思議なくらい鮮明に覚えています。皆さんに教えていただいたこと、導いて下さったこと、注意して下さったこと、叱って下さったこと、協力して下さったこと、支援していただいたこと。すべての方々に、心から感謝しています。

時代の移り変わりによって、各人さまざまな問題点や悩みが生じるのが社会です。これからは、「私にもまだ何か…」を探りながら、生きていこうと思います。

末永いお付き合いをよろしくお願いいたします。

私の健康法「鼻呼吸」

臨床研修教育科病院講師 松川 正永

世はまさに高齢化時代、私がこの歳まで勤務できたのも大学当局のよき計らいと、私を支えていただいた皆様のお陰だと感謝しております。

昭和43年、大学院(解剖学教室)を卒業、先輩の助言——即ち「母校に残った方がよい」との言葉——どおりすぐ大学に勤めることになり、その後平成9年に臨床研修教育科に移りました。以来、約37年間の長きにわたって勤めてこられたのも、いわゆる相撲道で言われる『心・技・体』が一致し、健康であったからだと思っています。そこで、自分自身の健康について、日頃最も気をつけていることをご紹介します、定年退職のご挨拶に代えさせていただきます。

内容は何も難しいことはありません。生を営む上で基礎中の基礎である「呼吸」ということです。昭和12年に生を授かって以来、呼吸ということについて学校で習ったのは「深呼吸」の仕方くらいのもので、普通の呼吸についてはするのは当たり前、仕方についてはまったく習った記憶はありませんでした。また、無頓着でした。しかし、世間では急に「突然死」が起こり、「睡眠時無呼吸症候群」が話題になってきました。



私見では、「口呼吸」が一因をなしているものだと思います、「鼻呼吸」にしなければ思いついたのです。その時はもうすでに半世紀もたっておりまして。

以来、努めて鼻呼吸に注意するようになりましたが、ただ、単に口を閉じて鼻で呼吸するというだけでは解決できませんでした。それは、意識のある時は良いとしても、睡眠中にはすぐに浅頭筋(表情筋)、中でも口輪筋が緩んで開口してしまうからです。どうすれば良いかと、試行錯誤した結果思いついたのは、舌をうまく使うようにすることでした。今までは舌を下顎前歯の舌側におさめ口を閉じていたのを、舌を伸ばし舌尖を上顎前歯の裏、すなわち口蓋側から硬口蓋につけるようにしました。すると、口唇も自然に閉じるようになったうえ、舌が壁となって狭い口の中で気道を閉じてくれるのです。この結果、鼻呼吸もスムーズに行えるようになり、また安静空隙(上・下歯の間にできる2～3mmの隙間)も保てるような楽な顎位になりました。ただ、問題なのは会話をする時と飲食物をとる時以外、絶えず舌下神経を刺激しなければいけないことです。しかし、私の経験では、1カ月もトレーニングすれば自然にできるようになります。睡眠中でも然りです。

鼻呼吸の効用は吸気を暖め、また適度な湿度を持たせることです。このような吸気は喉にも肺にも優しいのです。空気中の異物(塵埃・細菌・ウイルス等)は鼻毛でもある程度防げ、細い物は鼻粘膜の繊毛で咽頭に運ばれ、唾液と共に嚥下し胃酸、消化酵素で処理され、糞と共に体外へ出してくれます。処理できない物は白血球が助けてくれます。老齢になって口呼吸をしていると、口渇が起こり、上手に異物を嚥下することができなくなり、肺炎を起こしやすくなります。睡眠中も鼻呼吸していると、酸素が全身に行きわたるので寝覚めもよくなり、リフレッシュしてくれるのです。ただ、鼻呼吸が良いといっても、鼻に炎症がある人にはできないことです。この人達は残念ながら、口呼吸になっても致し方ないと思います。

一方、老齢になると困ったことに、「体のサビ」と呼ばれる活性酸素が身体に溜まってくることです。最近の研究によると、細胞内の蛋白質合成を行う「小胞体」中の“ERp44”という蛋白質が、細胞を活性酸素から守り、老化を予防してくれることが判ってきたそうです。この蛋白質を利用する医療が確立されれば、

さらに寿命が延びるような気がいたします。

最後になりましたが、皆様のご健康とご発展を願い、ご挨拶に代えさせていただきます。

定年にあたって

附属病院事務長 吉田 敏昭

43年と7カ月、皆さん方のご指導とご支援があればこそ無事、定年を迎えることができ、本当に有難うございました。

思い起こせば昭和36年、ふとしたご縁で大阪歯科大学に就職することになりました。ちょうど、天満橋学舎が竣工し、大学の機能がすべて天満橋に移転した直後でしたので、まだ改装前の牧野学舎は夏季休暇中でもあり、実に殺伐としたものでした。運動場の真向かいに木造の建物があり、医科系の大学なので実験用の動物でも飼育しているのだろうと思っていましたが、それがいわゆる進学科(教養課程)の教室とのことで、驚嘆いたしました。採用試験で新田名誉教授、青山教授、石田大学事務長(何れの方も既に故人)のお三方に面接を受けましたが、その時の白衣姿は今でも鮮明に覚えております。また、待遇の低さには驚かされました。学生時代の親からの仕送りが当時15,000円、始めていただいた月給が手取り11,000円ほどだったからです。

私が本学にお世話になった理由は母の一言でした。——「敏昭さん、人生は一生勉強ですよ。貴方は大学時代にいったい何を学んだのですか。待遇が何ですか。大学教授の先生方と同じ職場で働かせていただくということは、日頃のお付き合いを通して一生勉強させていただける(できる)ということですよ……」。私自身は、ほんの腰掛での積もりでございましたが、まさか定年まで続くとは思っていませんでした。

当時の進学課程の先生方は、非常に教育熱心でした。いわゆる専門学校から新制の大学に昇格し、「医科に追いつけ、追い越せ」が当時の飯塚理事長、吉崎学長をはじめ新田進学主事のスローガンで、当時の非常勤講師の先生方は総合大学にもひけをとらない錚々たる



スタッフがそろっていました。進学課程での進級考査(専門課程への進級判定)では、対象となる一人ひとりの学生さんの将来像を想定しながら、朝9時から夜8時頃まで実に熱心に議論と意見が交わされました。また、本来の大学のあるべき姿(将来像)を求め、今在籍する学生さんの一人でも、二人でも、この人達が卒業し、大学に残り、その数が増えるにしたがってやがて医科に追いつき、追い越す時代が来るとの信念(教育方針)で教育を実践されておられましたことは、今も忘れられません。

それから43年が経過しました。今思うに、果たして先人たちのスローガンは生かされてきたのでしょうか？

医科に追いつけ、追い越せどころか昨今では、新設の歯科系大学にも教育、研究、診療、歯科医師国家試験の合格率、そして世間の評価においても残念ながら、追い越された感がしてならないのは、進学課程で育てられた私だけでしょうか！——と過去を振り返ることがあります。

それぞれの大学は、独自の建学の精神、教育方針があり、これに則り運営されていることは申すまでもありません。本学の建学の精神は下記の通り記されております。

「歯科医療における専門的知識、技量の重要性を自覚させ、旺盛なる研究意欲を醸成し、自らの選んだ道に深い使命感をもつとともに、社会に対する奉仕的人生観を体得させ、さらに健康にして活動力のある情操豊かな人間形成をおこなう。」

まず、大学に勤務する教職員全員がこの精神を理解し、これに則りそれぞれの分野で努力することが必要です。どうか今一度、「本学(大学)の使命とは何か」を、一人ひとり考えてみるのもよいではありませんか？

前進することは必要ですが、しかし時には振り返り、原点に戻り今を見直すことも必要な気がしてならないのは、定年を迎えたという年齢のためでしょうか？

大阪歯科大学の益々の発展を祈念しつつ、定年にあたり、ふと思いつくまを……！

永い間のご指導、ご鞭撻、本当に有難うございました。

図書館セミナー開催 「インパクトファクターを読む」

2月23日(水)午後4時から、図書館セミナー「インパクトファクターを読むー歯学雑誌の動向と学術パフォーマンス評価ー」が4号館1階のコンピューター実習室で開催された。まず、川添館長からインパクトファクターを理解してもらうことの意義について説明があり、講師としてトムソンサイエンティフィックの情報アナリスト宮入暢子氏を迎え、各講座の教授を始め教員ならびに関係事務職員30数名が聴講した。



まず、インパクトファクターの数値が個人や研究機関の業績評価に使われる傾向にある現状を踏まえて、個々の雑誌に付与されているインパクトファクターとはどのようにして算出され、またその数値はどのような意味を持っているかを説明された。

インパクトファクターは、“Journal Citation Reports (JCR)”に収録されている指標の一つであるが、その基には膨大な引用データを1件1件処理し、データベース化をしている。引用データ収録の対象となっている学術雑誌は8,800誌以上で、毎年1,200,000件にのぼる論文の参考(引用)文献25,000,000件を一定の基準にしたがい著者・所属機関・雑誌名・発行年・論文形式など細かくインデックスされている。その引用データの大部分が収録誌6,000を超える自然科学分野である。また、収録対象となる雑誌も定期的発行・編集方針・内容などの厳格な基準により選定される。毎年約2,000誌を調査し、そのうち約10%が収録誌に採用され、逆に一定の基準を充たさなくなった雑誌は収録対象からはずされる。

さて、その膨大な引用データ(Citation Index)を編集し、Web上で個々の論文単位で引用・被引用データを検索できるようにしたのが“Web of Science”であり、さらに1年間の雑誌単位にデータを集計したのがJCRである。そのJCRで中核をなす指標がインパクトファクターである。インパクトファクターは引用データの発行年に着目し、調査年を除く過去2年間に的を絞って論文の引用回数を調べる。なぜ、2年間なのかはおくとして、2年間の引用回数が多いということは、引用された論文を掲載している雑誌がその主題分野に

おいて、最新の研究について影響力をもち、重要であることを示している。つまりインパクトをあたえる論文を掲載している雑誌と評価される。したがって、インパクトファクターが雑誌の重要度を相対的に測る尺度となりえても、その数値は雑誌に掲載された個々の論文には及んでいないのでそれを直接、個人あるいは研究機関の業績を測る尺度にするには問題がある。もちろん、インパクトファクターの高い雑誌に論文が掲載されることは、厳しいピアレビュー(審査)を経てのことであり、その論文の質の高さを示している。ただ、指標の方向が違っているのである。また、インパクトファクターは雑誌のタイプによりその数値に影響があると考えられる。レビュー論文を多く含む雑誌は比較的インパクトファクターが高い。分野によっては、レビュー誌が上位を占めている分野もある。これは、レビュー記事がその分野の最新の情報を包括的に取り上げているため、一般論文の序文あたりに引用されるケースが多いと考えられる。

JCRの雑誌評価指標

JCRの各データは最新年1年間の引用データに基づき更新されるので、年度ごとに新しくなる。

Impact Factor

・1年間にある雑誌の論文がどれだけ引用されたかを示す指数。

・計算式(2004年のA誌のImpact Factor)

$$\frac{\text{2002年と2003年のA誌の論文が2004年中に引用された回数}}{\text{2002年と2003年のA誌の論文数}}$$

* 調査年を除く過去2年間の論文が調査年1年間において引用された回数を2年間の論文数で割ったもので、1論文あたりの引用回数を示している。

Immediacy Index

・同年中の引用を示す指数で、短期間での引用を示している。

・計算式(2004年のA誌のImmediacy Index)

$$\frac{\text{2004年のA誌の論文が2004年中に引用された回数}}{\text{2004年のA誌の論文数}}$$

* 調査年中にすぐ引用されることは研究が日進月歩の状況にあることを示しており、先端分野ではこの数値が高い。

Total Cites

・1年間にある雑誌の論文が引用された総数。

Articles

・1年間にある雑誌に掲載された論文の総数。

Cited Half-Life

・1年間に引用されたある雑誌の論文を発行年別に調べ、過去に遡って累積し、引用された総数の50%に当たる年数。

Citing Half-Life

・1年間にある雑誌に掲載された論文の引用文献を発行年別に調べ、過去に遡って累積し、引用総数の50%に当たる年数。

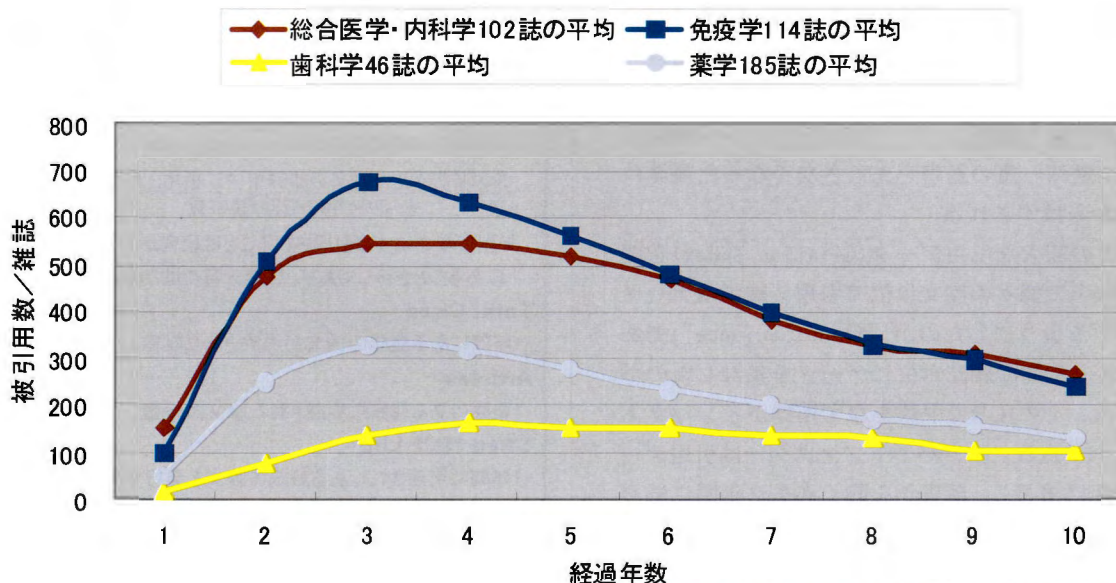
JCRでは主題分野ごとに雑誌を分け引用データを掲載しているが、分野により引用の現れ方が異なっていることを指摘された。内科学、免疫学、薬学、歯科学4つの分野について引用された論文の発行年ごとの件数をそれぞれの平均値で調べると、免疫学の雑誌では3年前の論文が引用される件数が約700件と最も多く、これをピークに10年前の約250件まで毎年ほぼ一定のカーブで減少している。内科学もピークの件数は少ないもののほぼ同様なカーブを描いている。薬学でも経年的な件数の差異は小さいが同様な線を描いている。一方、歯科学では過去10年間顕著なピークは見られず、毎年100件から200件の間で件数は平均している。これは、免疫学という先端分野では最新情報が取り上げられる比率が高いことを示しており、逆に古い情報は急激に取り上げられなくなることも示している。歯科学では、雑誌によっては先端的な傾向を示す雑誌もあるかも知れないが、全体としては経年的な件数の差異はほとんどなく、継続的な研究が主流をなしていることが示唆される。(表1)

次に、JCRに収録されている歯科学分野の雑誌46誌について、“Journal of Dental Research(JDR)”を中心に分析された結果を報告された。JDRの2003年のインパクトファクターは“2.702”で歯学雑誌ではトップの数値を示していた。これは、2003年1年間にJDRの2001年に掲載された論文の被引用回数540回と2002

年の330回の合計870回を、その2年間にJDRに掲載された論文数322で除したものである。つまり、JDRは2003年1年間に、過去2年間の論文について1論文あたり2.7回引用されたということを表している。また、Immediacy Indexは“0.355”で、これは2003年にJDRに掲載された論文が同年中に引用された回数を論文数で除したもので、1論文あたりの被引用回数を表している。Immediacy Indexは同年中の引用であるから、1年の早い時期に出版された論文あるいは発行回数の多い雑誌の論文が引用を受ける条件として有利である。1年の後半以降に出版された論文は同年中には引用されにくい。

JCRの指標には、雑誌ごとに1年間に引用された論文および引用している論文の発行年別件数をもとに過去に遡り、それぞれの累積件数が50%となる年数を示すデータがある。前者をCited Half-Life、後者をCiting Half-Lifeと言い、その雑誌が1年間どのような年代の論文が引用され、また引用していたかがわかる。JDRでは、Cited Half-Lifeが10年以上であるのに対し、Citing Half-Lifeは6.8年である。つまり、古い年代の論文も多く引用されているということは、JDRは古くから現在においても影響力のある論文を掲載してきたことを意味する。また、JDR自身は他の歯学雑誌よりも比較的新しい論文を引用しており、新しい研究発表が行われていることを示唆している。

(表1) 主題分野による発行年別被引用回数の違い



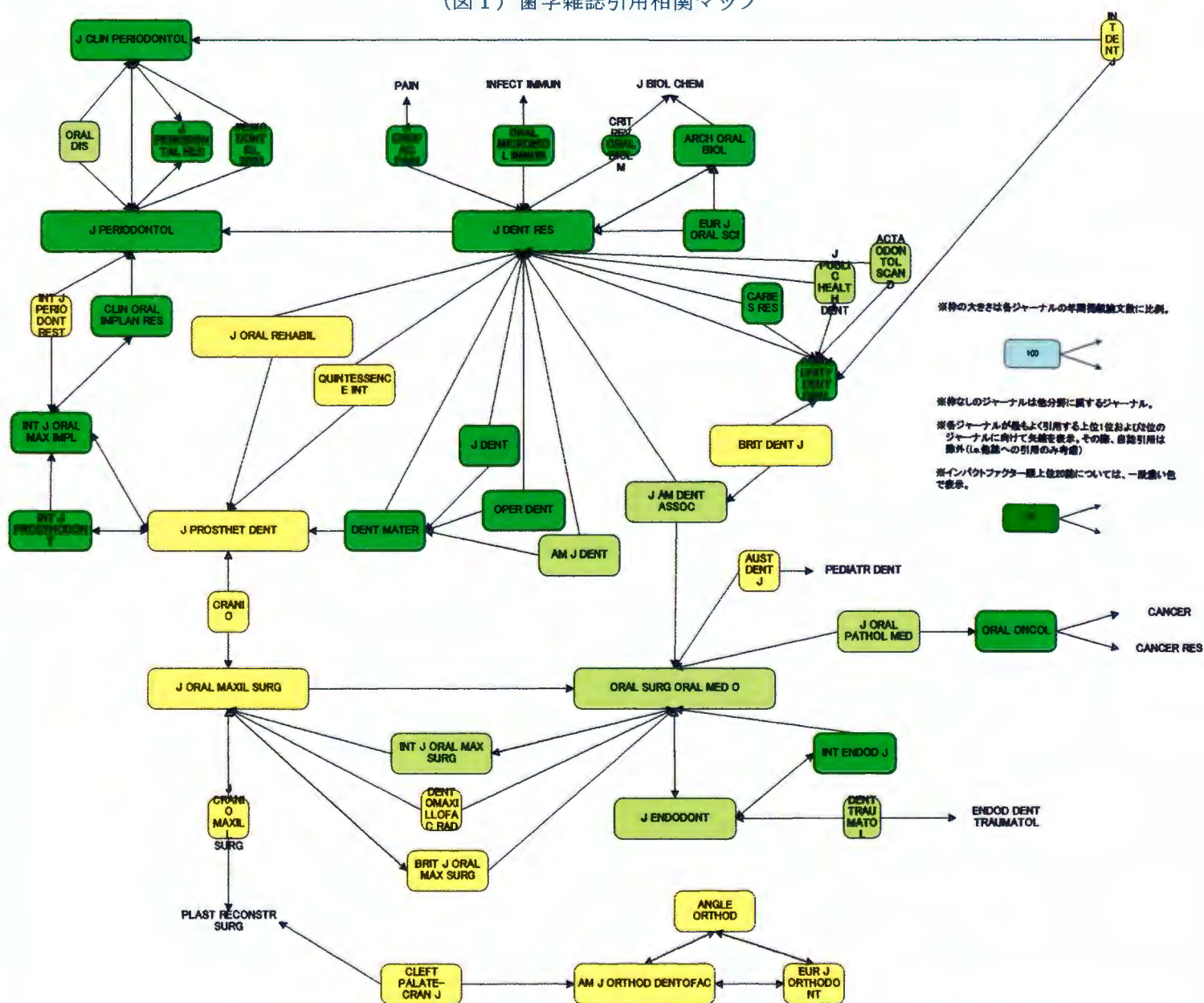
(「インパクトファクターを読む」講演資料より抜粋)

ODU NEWS No.137

最後に、46の歯学雑誌それぞれが引用している上位1位と2位の雑誌に向け矢印を引いた「歯学雑誌引用関連マップ」を示され、一目で引用関係から見た歯科雑誌のつながりが理解できた。やはり、一番多く矢印を受けていたのはJDRであった。JDRは歯科分野において中心的な役割を担う総合誌であるが、基礎系から臨床系からも多くの矢印を受けている。特に、基礎

系の雑誌は、一つはJDRにもう一つは歯科以外の分野の雑誌に矢印を放っていることが特徴的である。また、引用関連マップから、専門分野ごとに小グループを形成していることがよくわかる。J Periodontol を中心とした歯周病系、J Prosthet Dent を中心とした補綴系、Oral Surg を中心とした口腔外科系などははっきりとした引用関係による結びつきを示している。矯正関係

(図1) 歯学雑誌引用関連マップ



(「インパクトファクターを読む」講演資料より抜粋)

は、Angle Orthod, Am J Orthod, Eur J Orthod の3誌が互いに矢印を受け合い、独立したグループを形成している。今後、この引用関連マップがどのように変化していくのか興味はつきない。(図1)

セミナー終了後のアンケート調査では、インパクトファクターをはじめ“Journal Citation Reports”の指標について知らなかったという回答が多く、講習を受け、よく理解でき「有益だった」との回答を得た。第1回図書館セミナーの好評を受け、3月25日(金)午後1時から「Web of Science の使い方」説明会がコンピュータ実習室で開催された。Web of Science は5月31日までフリートライアル期間中であり、また個人の論文単位での引用された回数、引用している論文などがわかるため、多数の教員が出席した。

寄 贈

下記の寄贈を受けましたので報告します。寄贈いただいた各位には心より感謝いたします。

・大阪歯科大学第32回卒業生（甲子会）

卒業20周年を記念して 平成17年2月19日寄贈
学術研究奨励基金として 200,000 円也

・大阪歯科大学第53回卒業生

卒業を記念して 平成17年3月22日寄贈
天満橋学舎図書館分室へ個人用閲覧机6セット
1,000,000 円也

・毛利 学教授

定年退職を記念して 平成17年3月31日寄贈
学術研究奨励基金として 1,000,000 円也

人 事

昇 任

歯科保存学講座	助教授	井上 昌孝
歯科保存学講座	講師	吉川 一志
		以上H17.1.1付
口腔インプラント科	病院講師	岩田 光生
		H17.2.1付

教員採用

歯周病学講座	助手	信藤 孝博
		H17.2.1付

教員移籍

細菌学講座	助手	真下 千穂
		H17.3.1付

定年退職者

外科学講座	教授	毛利 学
歯科保存学講座	教授	井上 正義
口腔診断科	病院教授	北條 博一
臨床研修教育科	病院講師	松川 正永
病院事務部	事務長	吉田 敏昭
		以上H17.3.31付

みなし定年退職者

歯科保存学講座	助手	小林 久紀
大学庶務課	主任	峰松 年香
附属病院	准看護師	松本 妙子
附属病院	歯科衛生士主任	宮地 和子
		以上H17.3.31付

依願退職者

附属病院	歯科衛生士	中西 弥樹
		H16.12.28付
附属病院	看護師	金田 裕子
		H17.2.28付
口腔外科学第二講座	助手	門田 秀隆
有歯補綴咬合学講座	講師	木村 公一
歯科保存学講座	助手	廣瀬 泰明
歯科衛生士専門学校	助手	岩佐 藍
		以上H17.3.31付

講師（非常勤）委嘱

小児科学	住本 真一
	H17.2.1付

委 嘱

ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会	
委員長	田中 昭男
	H16.12.9付

あとがき

—余談—

新年互礼会の挨拶で、佐川理事長は「寧ろ、鶏口となるも牛後となる(こと)なかれ」という中国のことわざを引用して、人の後を追うのではなく「何事も自ら積極的に求める」姿勢が必要であるという話をされたが、この「鶏口牛後」は元朝初期に曾先之(そうせんし)が編纂した「十八史略」におさめられた逸話である。十八史略はその名のとおり「史記」をはじめ18の史書を故事・逸話を中心にその概略をまとめたものである。

さて、「鶏口牛後」であるが、時代は戦国時代・紀元前4世紀後半、中国は「戦国の七雄」と呼ばれる秦・楚・燕・斉(せい)・趙・魏・韓の7つの国に分かれていた。その中で西方の「秦」が勢力を伸ばし、他国を圧倒しようとしていた。そうした中、縦横家(諸国を遊説して外交を論じる者)の蘇秦(そしん)は最初、秦に遊説に行ったが採用されず、そこで「燕」に赴き「趙」との同盟を説いた。さらに、趙に赴き秦に対抗するには6カ国の同盟が必要であると説く。趙の肅侯から遊説資金を得て、蘇秦は諸侯を訪ね、広く世間に流布していることわざ「寧ろ鶏口、無ろ牛後」(小さな組織のトップになっても、大きな組織の尻尾であってはならない)を引いて、大国の秦に従属するより小国であっても連合し独立を保つことを説いた。こうして、南北6カ国による縦の同盟が成立し(紀元前333年)、蘇秦はその宰相となった。

しかしその後、蘇秦と同じ鬼谷子(きこくし)門下生で秦の宰相となる張儀が秦と東方の6カ国をそれぞれ単独に同盟させようとする「連衡策(衡は横)」を採り、6カ国同盟はもろくも崩壊した。一方、蘇秦の政策は「合従策(従は縦)」と呼ばれ、ここから「縦横家」や「合従連衡」という言葉が生まれている。

ところで、蘇秦も張儀も自らの理念・理想を広めるため遊説したのではない。自らの考えを、王に認めてもらうため遊説したのである。蘇秦は最初に出向いた秦では恵王に「戦力を整え、他国を併合しなさい」と他の6カ国とはまったく違うことを進言している。すなわち、相手を説得し任官されることが目的で、今でいう「ディベート」に近い。ただし、死力ならぬ知力を尽くした命がけのディベートである。実際、蘇秦は

事情あって「斉」の国にいたるとき刺客に襲われ、瀕死の重傷を負う。見舞いに来た斉王に「もし私が死ねば車裂きにして市場でさらし者にし、『蘇秦は内乱を企てていた』と宣言してください」と言い残して息をひきとった。斉王が言われたとおり実行すると、功名心に駆られた犯人が名乗り出た。王はその者を処刑した。

蘇秦は思考と弁舌だけを頼りに諸国に赴き、乱世を生き抜いてきた。死に臨んでも、自らの死も客体化して考えることのできるリアリストであった。

蘇秦や張儀の話は、もともと前漢時代の司馬遷の「史記」や劉向(りゅうきょう)の「戦国策」に出てくる逸話である。今井学長が引用された「人様にかけて情は忘れても、人様から授かった恩情は忘れてはならない」という格言も、この「戦国策」に出てきます。

先の蘇秦の話から約80年後、秦が趙の都邯鄲(かんたん)を攻撃してきた。趙は何とか「楚」と「魏」の援軍を得て秦を撃退することができた(紀元前257年)。趙王が出迎える中、凱旋しようとする魏の公子信陵君に食客の唐雎(とうしゅ)が与えた言葉——「私は『物事には知ってはいけないことと、知っていなければならないことがある』と聞いております」としたうえで「人が自分を憎んでいることは知っていなくてはなりませんが、自分が人を憎んでいることは知らなくてよいのです。また、人の恩は忘れてはいけませんが、他人に施した恩は忘れた方がよいのです……」。

唐雎は信陵君に「秦を破り、邯鄲を救い、大きな恩を趙国に与えたが、そのことは忘れて、王の丁重な出迎えを予期せぬこととして会われてはどうか」と諭した。信陵君はうなずいた。

人は、格言とは逆に「憎しみを感ぜず、憎しみは忘れず。恩を忘れ、恩にきせる」のが常であり、このことに無自覚な人は自分本位で、人間関係にも無自覚になりやすい。これを自覚することは、自己の中に自己と同じ人格を持った他者を発見することに他ならない。

大阪歯科大学広報 第137号

発行日 平成17年3月31日

編集発行 広報委員会

〒573-1121 枚方市楠葉花園町8-1

電話 072-864-3111

平成17年度(2005年度)
歯科医師臨床研修指導歯科医講習会実施のお知らせ

平成18年度歯科医師臨床研修必修化を控え、各臨床研修施設において指導歯科医の任にある者、または指導歯科医となる予定者に対して教育指導、教育技法および教育評価に関する講習会を実施し、指導歯科医の資質の向上および指導歯科医の確保を図ることを目的とする。

1. 主 催

大阪歯科大学、(社)日本口腔外科学会 (共催)

2. 日 時

平成17年7月9日(土)午前9時30分～7月10日(日)午後5時の2日間

3. 会 場

大阪歯科大学附属病院 (大阪市中央区大手前1-5-17 <TEL>06-6910-1111)

4. 参加資格

各研修施設、または研修施設を予定されている指導歯科医の任にある歯科医師、または指導歯科医となる予定の歯科医師で、臨床経験7年以上の者。

(注) 現行制度では、指導歯科医師講習会は受講が望ましいという位置づけですが、必修化以降は受講が必須となります。従って、歯科医師臨床研修施設として既に指定を受けている施設であっても、指導歯科医を受講した指導歯科医が不在となった場合、平成18年度からの指定を継続できなくなる可能性があります。

5. 定 員

40名 (病院歯科20名・臨床研修指定施設20名)

6. 日 程

当日配布します。

(注) 本研修会は、ワークショップ形式で行います。服装は、軽装(カジュアルウェア等)で願います。

7. 参 加 費

35,000円 (教材費・昼食2回・総合討論会費を含む)

8. 申込方法・問合せ先

「申込書・個人調書」に必要事項を記入の上、下記に申し込んでください。

〒540-0008 大阪市中央区大手前1-5-17 大阪歯科大学附属病院内

歯科医師臨床研修指導歯科医講習会実行委員会事務局 宛

TEL : 06-6910-1111 FAX:06-6943-8051

9. 申込締切

平成17年6月6日(月)午後5時必着

10. 参加者の決定

選考の上、平成17年7月1日(金)までに参加決定通知により連絡いたします。また、選考から漏れた場合も通知いたします。

11. 修了証書

本講習会修了者には、修了証書を授与いたします。